

石原和著

『「ぞめき」の時空間と如来教 ——近世後期の救済論的転回』

(法藏館・二〇二〇年)

芹口 真結子

本書は、喜之を開祖とし、名古屋を中心に活動を展開した如来教を分析対象としたものである。第一部「一八〇〇年前後の救済課題と如来教」、第二部「一八〇〇年前後名古屋の宗教環境と如来教世界の形成」の二部構成となっている。紙幅の都合上、目次の提示は省略し、各章の概要をまとめた上で、内容の検討を行う。

一 本書の内容

序章では、まず、如来教の概要を説明した上で、民衆宗教研究・如来教研究の研究史整理と残された課題についてまとめている。著者は、一八〇〇年代という時空間、都市名古屋という宗教環境の二つの視点から如来教を分析することで、様々な研究視角から分野横断的なかたちで宗教像の再構築を試みている。近年の近世宗教史研究との架橋を目指すとしている。

第一部第一章「一八〇〇年前後における救済の動揺——三業惑乱と如来教」では、教祖喜之が生きた時代に真宗教団で異安

心が頻発したことに目を向け、異安心による救済方法の動揺が門徒の信心に影響を与えたことを指摘する。喜之の教えは、西本願寺最大の異安心事件である三業惑乱で問題となり、最終的に本山から異安心とされた三業帰命説における能動的・実践的救済論に対する一つの応答として位置づけられている。

第一部第二章「名古屋城下の真宗異安心と如来教——尾州五人男をめぐる」では、如来教の活動が展開していた同時期に尾張国の東派で発生した尾州五人男事件を取り上げ、五人男の救済論の特徴と如来教との関係性について考察している。一八〇〇年前後では、心の定置とつとめの方法が救済課題となっており、五人男と喜之の教説がそれらへの応答を実現していたこと、喜之は教学的制約を持たなかった点で五人男とは異なり同様の教えを維持可能であったことなどを指摘する。

第一部第三章「渴仰の貴賤」と如来教——作善実践に向き合う」では、高力種信著『金明録』に登場する「渴仰の貴賤」に注目し、善書を介して受容された作善実践とその葛藤について言及している。その上で、善心獲得による新しい救済を如来教が提示したことを明らかにしている。

第二部第一章「如来教世界の形成過程と秋葉信仰」では、名古屋城下における大規模な火事の続発や、熱田円通寺の秋葉信仰の拠点化により、急速に拡大した秋葉信仰に着目している。この秋葉信仰を金毘羅の利益へ包摂した如来教は、他信仰に柔軟に対峙し、自己の教説の変容を成した点で、異安心に対する

真宗との対応の違いを示している。

第二部第二章「如来教説教の想像力としての近世親鸞伝」は、喜之が説教で語った「高祖親鸞聖人御枕石」を題材に、同時代に流布していた寺社縁起や高僧伝といった宗教知が、民衆宗教の世界観の形成へどのように関わり合っていたのかを考察するものである。如来教における「高祖親鸞聖人御枕石」の語りは、枕石寺の縁起に立脚したものではなく、絵解きに由来する宗教知によって構築された可能性があることを指摘し、如来教が当時の宗教観や宗教知に根ざした説教を行っていたことで、人々に受容されたことを提示している。

第二部第三章「文政地震と如来教」では、文政二年に発生した文政地震を事例に、災害に際して動揺する人々に対する如来教の向き合い方と、非日常の事態に対する説教の特徴について検討している。喜之の地震説教の特徴は、仏神と地震とを関連付けて語ることにあるが、それは近世社会に共有された世界観であったこと、地震の発生要因と人間の行為を関係付けることで、自省の契機とさせたこと、予言の的の中に意味を持たせる臨機応変な説教を展開していたことにあるとする。

結章では、各章の分析をまとめた上で、本書の分析を通し、如来教が「ぞめき」の時空間における能動的・実践的な救済↓つとめの方法の模索↓心の定置による救済という救済パラダイムの転回（三一―九頁）のなかで展開したことを示したと位置づけている。また、尾張藩の藩政改革に触れ、名古屋の人々

をとりまく社会構造の変化にも目配りをしつつ、如来教がかかる社会変化に即応した教えを信者に提示していたことを論じる。

二 本書の成果と論点

本書の特徴は、如来教の活動や教説を、一八〇〇年代に展開した諸信仰の影響のなかで再検討した点にある。これまでの如来教研究では、『お経様』の分析を通して如来教独自の世界観を再構成する手法がとられていた。無論、テキスト解釈に基づく教義研究のみに終始するのではなく、信者の動向分析や同時代の社会状況とも関連付けた検討も行われているが、とりわけ後者に関しては、同時代に存在した如来教以外の信仰活動への言及が手薄であったといえる。かかる先学の課題に対し、著者は都市名古屋という空間の特徴を踏まえ、同空間に併存した真宗や作善実践、秋葉信仰と如来教との影響関係について、書物流通なども視野に入れながら新たな如来教像の構築を試みている。

特に本書の独自性として指摘できるのは、東西本願寺教団の異安心（西派の三業惑乱、東派の尾州五人男）に注目したことである。異安心を媒介に、当該期の人々のあいだで問題となっていた救済課題がつとめの方法への問いと心の定置であるとし、如来教の教説がこうした救済課題に対応するものであったと位置づけたことは、如来教を当時の諸信仰のなかで見直そうとする著者の課題意識をよく反映したものであるといえよう。

次に、本書を通読するなかで評者が抱いた疑問点について、①事実関係・史料解釈に関わる点、②真宗との比較をめぐる点、③全体を通して抱いた疑問点、以上三つの観点から述べていきたい。

①事実関係・史料解釈に関わる点について。事実関係については、細かな点となるが、第一部第二章の尾州五人男に関する推移を説明するなかで、深励が本事件を理由に失脚したと記述されている部分(一〇〇頁)に関して触れておく。彼は、文化八年に一旦講師休職とはなったものの、一年を経たずに講師に復職しており、やや正確性に欠けた記述となっている。

史料解釈に関しては、第一部第二章で取り上げられた「新敷宗意」事件における、安永五年申一月の尾張藩寺社奉行触の解釈についてまず述べていく。著者は、触末尾の「村役人共可為越度者也」を、尾張藩側が「落ち度を指摘するまでにその摘発に躍起となっていた」(九四頁)と解釈しているが、これは近世の触文言の定型表現であると考えられ、やや過度にその意味を読み込んでしまっている。付言すると、この「新敷宗意」事件は、宗教者の身分にない俗人が参集し、宗門にない信仰活動をしていたことが、身分制に抵触する活動として藩側に問題視されたのであろうと思われる。同じような問題は、大工伊右衛門の文化一二年一〇月一日説教(二一九―二二〇頁)の把握にも存在する。著者は、史料中の「内輪」・「心得違」という語が、「新敷宗意」事件後の寺社奉行触にも用いられていること

から、断言できないとはしつつも、伊右衛門が真宗に関わる騒動に巻き込まれた可能性を想定している。だが、一一九頁で摘記されている伊右衛門の相談内容を踏まえるならば、身内あるいは大工仲間同士(＝内輪)のいさかきとも読み取れる可能性があり、この記載だけで真宗関係の問題を想定することはやはり説得力に欠けるだろう。

また、同章において著者は、靈瑞が語った自力の念仏と他力の念仏の違いについて、自力の念仏は「その時々々の信心に応じて称える」ものであると解釈し、信心を時と場合によって揺るぎないものにすることを靈瑞が重視しているとしている(一一一頁)。だが、引用史料中の「靈瑞云「信心ナリ称フルガ自力ト存シマス。」」は、原文を参照すると、「信心ナク称フルガ自力ト存シマス」とあり、信心を伴わない念仏が自力の念仏であるという意となる。

②真宗との比較をめぐる点について。先に、本書の独自性は、東西本願寺教団の異安心と如来教について、当該期の救済課題を念頭に置き、両者を関連付けながら論じている点にあると指摘した。この独自の観点は、近世宗教史研究と民衆宗教史研究を架橋させる試みとして意義深いが、著者の近世真宗把握に関しては、疑問点も存在する。

例えば、第一部第一章では三業惑乱を題材に、能動的・実践的な救済を示したことが、三業帰命説が人々に受け入れられた理由であるとし、一八〇〇年前後の救済課題を析出している。

だが、三業婦命説の教説面での特徴に関しては、近年、自力／他力という理解から進んだ議論が展開されている。具体的には、小林准士が、三業婦命説の特徴として儀式⇨外儀⇨内心の信（内信）の表出というベクトルの重視にあると指摘している⁽²⁾。小林によれば、外儀⇨内信というベクトルの重視は、門徒に対する有効な教化を模索する僧侶の課題意識が反映されたものであるとされる。この指摘は、教化者である僧侶側の動向について述べたものではあるが、つとめの方法への問いが当該期の救済課題であると述べる著者の議論にも深く関わるものであると考えられる。本書のなかで具体的な言及は見出せなかったため、著者の見解を知りたい。

第一部第二章では、如来教と五僧の教説では心の位置が重視されているのに比して、真宗教団側は心の位置や、つとめの方法への問いに上手く応答できていなかったと結論づけられているが、これも近世真宗教学の有り様を踏まえるとそのように言い切れないのではないかと思われる。心の位置を救済の最重要要件とするのは、なにも五僧に限ったことではない。学寮講師深励の教義解釈も、救済は口称という行為によって初めて成立するのではなく、信仰を体認した一念によって成り立つというものであり⁽³⁾、いわゆる心の位置を重視した教えを説いているともいえる。また、一一〇頁で著者が本山から問題視された教説として言及する秀山の主張（南無阿弥陀仏と称える者を御助け下さると信じる心が重要）は、阿弥陀仏の救済を信じて疑わな

ことが往生の要件であるという立場をとる信楽正因説をベースにしたものであり、それ自体に瑕疵があるわけではない。秀山および五僧の説き方の問題は、救済論を説く上で念仏を軽視、あるいは地獄墮在と関連付けた点にある。秀山の聞調で、「本願ノ御誓ヒヲ信スルニスキラヒ」があること（⇨念仏往生への言及を避けること）が問題とされているのがその根拠となる⁽⁴⁾。

なお、尾州五人男と三業惑乱との関係が必要以上に強調することも気になるところである。五僧も本山・学寮側も、隣山の惑乱を強く意識していた点は評者もかつて指摘した⁽⁵⁾。だが、当該期の尾張国には、三業婦命説以外のさまざまな教説理解が併存していることも留意しなければならない。一例を出せば、秀山が聞調のなかで、法立村の門徒が「唐黍木ヲ引クトテ信ヲ得タ」・「朝ニ雑煮ヲ喰フトテ信ヲ得タ」と述べたのを聞き、それは外道天魔だと批判したことがあると述べている⁽⁶⁾。これはおそらく三業婦命説とは別の教義理解であり、かかる種々の教説理解の存在を視野に入れた上で議論を進めることが必要となる。

以上に加えて、著者が如来教を分析する上で、やや真宗との関わりを強く意識しすぎているきらいがあることも評者は気になった。如来教の信者には、本書が論証しているように、確かに真宗門徒も含まれていることは把握できる。だが、さまざまな宗派の開祖が喜之に降りていることからわかるように、如来教の信者は真宗門徒だけで構成されているわけではない。自力／他力信仰の理解については、その位置づけをめぐる宗派

ごとに差異があると考えられるし、さまざまな宗派に属する人々が集うからこそ、自力修業の問題が顕在化しやすかったとも考えられる。如来教を分析するに際し、真宗(門徒・信仰)を定型例として参照することは果たして妥当だろうか。

最後に、③全体を通して抱いた疑問点について述べていく。

評者が通読して気になったのは、民衆宗教史研究などに代表される従来の宗教像と著者の主張との距離である。著者は、同時代性・空間性を重視した新たな如来教像を描き出そうと試みているが、実際に描出された像は、意外にも従来の宗教像に近い部分が見られる。例えば、如来教の信者は、自身の救済のために様々な試行錯誤をし、ゆえに喜之から「自力」と批判されたが、これは奈倉哲三が見出した「三業固執の族」——人間の主体性に強く惹かれる人々——と重なりと著者は述べている。奈倉は、「三業固執の族」について、「真宗の思考という枠のなかで、近代へのほとんど入口に立つ人々」と評価しており(奈倉の三業派評価の妥当性に関しては、後学による三業惑乱研究で批判も加えられているが、ここでは立ち入らない)、同見解に沿うかたちで如来教の信者を位置づけると、近代性との距離の近さから民衆宗教の歴史的意義を見出そうとした従来の民衆宗教史研究と同じ陥穽に陥ることになるのではないか。

また、第一部第二章で、真宗門徒のうち如来教を受容した人々が生まれたのは、真宗教団の教化が時代的課題に対応できず、つとめの方法への問いや心の positioning による救済を如来教に求

めた結果であるとしている。これもまた、形式化した仏教以外の信仰を求めた民衆の前に民衆宗教が登場したと把握する民衆宗教史研究の見取り図と相似的である。無論、生きる上での大小さまざまな困難の解消を求める人々が、既存宗教ではなく民衆宗教を解決手段として選択している点は見逃してはならない。真宗信仰以外の諸信仰を取り入れた尾張真宗門徒が、何故如来教を選択したのかを追究の対象とすることで、従来の議論の構図に落とし込まないかたちで議論を深めることができるように思われる。

現在、近世宗教史研究をめぐる動向として注目されるのは、他時代・他地域との比較や、宗教学など近接諸分野との架橋、学説史の整理など、多角的な視座から議論の総合化が図られることである。本書は、そうした研究潮流を反映し、近世社会を構成する一要素として如来教を位置づけ直そうとした成果として評価することができるだろう。

注

- (1) 芹口真結子「教学論争と藩権力」(『近世仏教の教説と教化』法藏館、二〇一九年) 八〇頁。
- (2) 小林准士「神祇礼拝論争と近世真宗の異端性」(『歴史評論』七四三、二〇一二年)。
- (3) 廣瀬南雄「真宗学史稿」(法藏館、一九八〇年) 一七五頁。
- (4) 大谷大学図書館蔵「尾州五僧安心御聞調」二(宗大六一)。

(5) 注(1)拙論文。

(6) 注(4)史料。

(7) 奈倉哲三『真宗信仰の思想史的研究——越後蒲原門徒の行動と足跡』(校倉書房、一九九〇年) 一三三五頁。

(岐阜大学助教)

岡安儀之著

『「公論」の創生「国民」の誕生』 ——福地源一郎と明治ジャーナリズム』

(東北大学出版会・二〇二〇年)

小川原 正道

福地源一郎が『東京日日新聞』に入社した一八七四年から約十年間を対象に、同紙上で開陳された福地の言説と思想を読み解き、福地の再評価を試みたのが、本書である。

著者は、福地の死に対する夏目漱石の辛辣な評価から筆を起し、福地に対する「御用記者」「官権派」「漸進主義者」「保守主義者」「変節漢」といったネガティブなイメージは当時から存在しており、それが今日の福地研究の低調さにつながっているとする。しかし、明治期において福地は、福沢諭吉と二分するまでの影響力を誇っていたとして、著者は新聞記者としての福地について、近代日本のメディアの発達と民主化を考える上で欠かせない人物であるとし、漱石のような評価が生まれ、福地が地に埋もれた存在になった経緯、明治期に社会を動かしていた福地の新聞論説とはいかなるものだったのか、を問う。本書の射程は、福地が『東京日日新聞』の記者となった一八七四年からおよそ十年間にあてられ、従来のネガティブなイメージを解体し、福地を無視する原因となった戦後歴史学の進歩史